

それは無意識の偏見!?

ジェンダー・バイアスに 気づくことから始めよう

無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）には「男性はリーダーに向いている」、「女性は家事や育児をするものだ」といった、ジェンダー（社会的・文化的な性別）に関するものが多くあります。これらのジェンダーを理由とした無意識の偏見は、ジェンダー・バイアスと言われ、個人の可能性や選択を狭めてしまうことにつながり、男女共同参画の推進を阻む要因にもなっています。自分らしく活躍できる社会に向かって、ジェンダーを理由とした無意識の偏見・思い込みについて、弘前大学男女共同参画推進室の山下助教にお話を伺いました。

無意識の偏見とは

「無意識の思い込みや偏った考え」のことで、過去の経験や周囲の意見、日々接する情報などによって誰もがもっていると言われています。「アンコンシャス・バイアス」とも言われています。



無意識の偏見による影響、影響を少なくする方法を聞きました。

無意識の偏見による 影響と注意点

「女性は理系が苦手」といった無意識の偏見があると、育っていく過程で、周りの人に言われたことが自分の中に刷り込まれて、苦手な手とされていることが実際の理系科目の成績に表れてしまうことがあります。家族や先生がポロツと言った一言が当事者の意識に影響していくと考えられます。また、ジェンダー・バイアスが採用や人事の場で、男性優位に扱われることが分かっています。例えば、男性と女性で履歴書の内容が全く同じ場合に男性が採用されたり、子どもがいる男性と女性の場合、男性の方が人事評価で高く評価されることなどです。子どもがいるという同じような状態でも、母親、女性であるという点で、低く評価されてしまう。それは、その人の能力や資質、業績ではなく、属性で無意識に判断されてしまい、結果として格差が生じていることにつながります。格差が生じているという状態は、無意識の偏見が働いていると考えて、見直した方がいいでしょう。

考え方の偏りは誰でも持っていますが、注意が必要なのは「みんなが持っているからいいよね」とはならないことです。その多くの人たちの偏りが集合すると差別につながるというところが問題です。あからさまな差別よりも無意識の偏見の方が無意識だけに厄介です。その中で、「これはおかしい」と誰かが声をあげると、無意識だったことが意識化されます。

無意識の偏見に気づいて 影響を少なくしていくためには

「この発言は差別的でないか」「誰かを傷つけることにならないか」と自分の発言が気になってくるとあると思います。「自分にはバイアスがある」と思って、物事の決定に臨むと、影響を少なくできると言われると思います。チェックテストなどを用いて、自分のバイアスをチェックしてみようというふうにか。自分とは何者なのかを見つめ直すことも有効です。また、身近な人に指摘されて気づくこともあります。チェックテストの結果や指摘されたことを頭の片隅に入れながら発言するということに、無意識だったことを意識すると思います。

教育プログラムの効果で無意識の偏見がほとんどなくなる、中立となるといった事例があります。無意識の偏見を乗り越えることが可能かは正直わかりませんが、向き合うことは可能です。一方的に講義を聞くだけではなく、対話により気づくことが多くあるでしょう。これからの未来をつくっていく子どもたちにはバイアスができるだけ少ないように接していくことが望まれます。



山下 梓さん
(弘前大学男女共同参画
推進室 助教)

ジェンダーの思い込みを チェックしてみよう

今までの自分にとっての
「当たり前」を疑ってみましょう。
無意識のうちに、性別による偏った見方、
考え方、行動につながっている
場合があります。

質問事項に「はい」「いいえ」でお答えください。

<地域生活編>

1. 法事になると“嫁”が総動員して準備にあたるのはあたりまえである。
2. 一緒に住んでいる長女がいても、喪主を務めるのは離れて暮らしている長男の役割である。
3. お祭りでは女性が裏方で食事やお酒の準備や片付けなどをしている。
4. 男性よりも女性の言葉づかいの悪さが気になる。
5. 女性が地域活動において中心的存在で頑張っていると、“女なのに目立ちすぎる”と思う。
6. 痴漢にあう女性は、本人に落ち度があったと思われても仕方がない。
7. 男性はまだしも、女性がたばこを吸うのは許せない。
8. 日頃の親戚づきあいや近所づきあいは妻任せである。
9. 会合で、お茶や食べ物を出したり、後片付けをするのは女性の役目である。
10. 町内会や自治会は、実際に参加するのが女性でも、代表は男性が良い。

判定結果 「いいえ」はいくつありましたか？

「いいえ」の数0～4個

あなたは、男性の役割、女性の役割にこだわっていませんか？どちらも同じように自由に参加できる地域の方が、きっと暮らしやすいはず。ほんの少し、生活を見直してみましょう。

「いいえ」の数5～7個

あなたは、ジェンダー平等なんて常識と思いつつ、周囲の目を気にしすぎて、意識と行動の矛盾に悩んでいるのかもしれない。さあ思い切って、古い常識から飛び出しましょう。

「いいえ」の数8～10個

あなたは、ジェンダーについてかなり高い意識を持っています。もちろん、あなたの行動もそうですね。あなたのような人が地域に参加することにより、地域の旧態依然としたジェンダー感覚はきっと変わっていくはずです。

無意識にこんな思い込みがありませんか？

○リーダーは男性、サポートは女性の役割

固定的な性別役割分担意識にとらわれていませんか？本来そのような役割分担をする必要はありません。お茶出しや裏方の仕事の間、女性は話し合いに参加できていますか？特定の人にだけ負担がかからないように役割分担に工夫をしましょう。そして、物事を決める際には性別にかかわらず、多様な人たちの話し合い、コミュニケーションが大切です。

○女性は意見を言わずに従うもの

誰もが発言しやすい環境ですか？これからは、多様性に対応できる地域社会が求められます。性別にとらわれず、意見を出し合い、共に行動するなどの日ごろからの取組が災害・復興の場でも活かされます。

出典：青森県男女共同参画センターHP ほかに「恋愛・結婚編」「家庭・家族編」「職場編」「学校教育編」があります。

ジェンダーチェック

検索

一人ひとり、そして社会全体の意識を変えるためには まず「ジェンダー・バイアス」に気づくこと

家庭や学校で、またメディアなどから刷り込まれていく「男だから」「女だから」というジェンダー・バイアスに気づき、「本当にそうなの？」という疑問を持ち、まずはあなたのまわりの“モヤモヤ”を見つめてみましょう。その気づきがやがて社会の中の偏見や差別・不平等感をなくすことにつながっていきます。

個人の能力や個性が尊重され、誰もがその人らしく活躍できるように、職場、家庭、地域においてジェンダー・バイアスに気づくことから始めてみましょう。

たかが呼び名、されど呼び名

考えてみよう 配偶者の呼び名

2021年6月～7月に青森県男女共同参画センターのホームページや講座等に参加した方に「配偶者」の呼び名に関するアンケートを実施し、67人から回答をいただきました。

アンケートでは、「自分の配偶者」「他人の配偶者」の呼び名について、ふだんの呼び名と男女共同参画の視点でどう呼べばいいか考えて、お答えいただきました。

ふだんの呼び名

自分の夫

順位	呼び名
1	お父さん、父さん、パパなど
2	名前
3	旦那
4	主人
5	夫

自分の妻

順位	呼び名
1	お母さん、母さん、ママなど
2	妻
3	嫁
4	名前

<アンケートから>

元々の意味を知っていますか？
主人・旦那…家長制・家制度下では、男性を家長として、家の「主人」、「面倒をみる人」の意味で「旦那」と呼ばれていた。
家内・奥さん…家の奥にいる人の意味。
嫁…息子の配偶者の女性。
夫婦には主従関係も優劣ありません。

例えば、婚姻を「入籍」と言うことは日常生活でなにげなく使われている表現ですが、これは戦前の家長制時代のように、女性が男性の戸籍に入るかのような誤解を招きかねない表現です。現在の戸籍上の婚姻とは、男女が親の戸籍から抜けて新しい戸籍をつくり、ふたりでそこに入るものです。慣用的な表現でも、男女の差別につながるものではないか見直してみましよう。

ふだん使っている言葉
どこが変なの？

気づいたこと・ご意見

<アンケートから>

- ・ジェンダー平等を実現するためのひとつのきっかけとして、「主人」「家内」という上下関係を当然視する呼び名を変えるためのキャンペーンを展開し、情報発信することが必要。
- ・呼び名は自由でいいのではないか。相手が心地よい呼び方にすればいいと思う。
- ・私は「夫さん、妻さん、パートナー、連れ合い」という言葉に何の違和感もなく使っているが、「そんな言葉気持ち悪い、聞いたことがない」と強く否定されたことがあった。
- ・「嫁」と呼ばれるのは嫌だし、誰かが言っているのを聞くと違和感を覚える。
- ・最近は配偶者のいない方をどう呼ぶかあれこれ考えている。特に片親を「シングルファザー／マザー」というのは失礼かなと思うが、失礼と思っている自分にこそ偏見を感じる。
- ・「パートナー」だと男女間のカップルだけでなく、同性間のカップルや婚姻関係のない関係性でも使えると思う。夫婦や家族にいろいろなカタチがあるので、ジェンダーや主従関係のない呼び名が普及してほしい。

男女共同参画の視点で
他人の配偶者の呼び名

主なもの

名前さん
パートナーさん
夫さん・妻さん
お連れ合い様

<アンケートから>

アンケートからは、自分の配偶者、他人の配偶者ともに「主人」「旦那」など元々の意味に関わらず、「多くの人が使っているから」「丁寧な感じがするから」「ほかに表現する呼び名がわからないから」などの理由で使用している方も多く見られました。次に、男女共同参画の視点で、「他人（第三者）の配偶者」の呼び名について回答してもらいました。

男女共同参画の視点で考える
他人の配偶者の呼び名

言葉狩り？ たかが言葉では？

他人の配偶者の呼び名について、男女共同参画を意識して答えていただきました。名前がわかる場合には名前で、わからない場合にはパートナーさん、夫さん・妻さん、お連れ合い様など、今はあまり馴染みがないかもしれませんが、使ってみませんか。言葉や表現は、繰り返し見たり、聞いたことで固定的なイメージを生み出し、個人のものの方にも影響を与えます。同時に、言葉は現実をつくり、変える力を持つています。多様化した現代では、男性だから、女性だからと単純に区別することはもはやできません。また、これまで不利な立場にあった人に寄りそって新しい表現を創り出すなど、差別や不平等につながる文化や伝統は時代に即して変えていくことも必要です。社会の変化が家族や親族をめぐる言葉にも表れます。たかが言葉、されど言葉です。